シンポジウム 1・司会の言葉

女性の尿酸値、小児の尿酸値（尿酸の基準値を考える）

富田真佐子¹⁾ 箱田 雅之²⁾

尿酸の基準値は、男女を問わず、 7.0mg/dl 以下とされている。これは、生理的狀態における血漿の尿酸塩飽和濃度が 7.0mg/dl であることから定められたレベルである。実際に痛風患者で、このレベルを下回る尿酸値を示すことは、発作時を除いてまず無い。しかし、血清尿酸値には男女差があり、痛風症例がほとんど男性であることから、女性においてもこの基準値が同様の臨床的意義を有するかについては、臨床的経験の蓄積は少ない。また、小児においても血清尿酸値は成人に比べて低く、痛風の小児例が通常の臨床の圏内には入って来ないことから、小児期における尿酸の基準値について明確になっていない部分がある。このような背景のもと、藤森会長のご発案によって本シンポジウムが計画された。

小児における尿酸の基準値については、その拠り所となる臨床的病態が非常に少ないのが現状である。しかし近年、胎児期における栄養状態が生活習慣病の発症に関連するとされ、出生時体重が小児期のインスリン抵抗性や、尿酸値にも関連するという報告がなされている。また、10歳代の高血圧例に対して、アロプリノールによる尿酸低下治療が血圧を下げる効果を示したことも報告されており、小児期における尿酸値の意義について徐々に知見が集積している。

本シンポジウムでは、小児科領域において尿酸値の検討を行ってこられた奈良女子大学の久保田優先生が、乳児期から中学生にいたる幅広

い年齢層における尿酸値の分布および基準値案について報告された。この報告で、小児における尿酸値は、検討された年齢層において、年齢と共に上昇することが確認された。生活習慣病の発症予備軍の観点から、信州大学の本郷実先生が、中学生の尿酸値と血圧や血糖値、脂質マーカーとの関連について報告され、中学生において、 7.0 mg/dl を基準とした高尿酸血症は、男子ではすでに10%近くになっており、この年代においても高尿酸血症は、肥満、高血糖、脂質異常と関連していることが述べられた。

成人男性における高尿酸血症は増加傾向であり、30歳代では30%に達しているようである。女性においても高尿酸血症は増加傾向であるが、その割合は、閉経後と考えられる年齢層においても3%台である。したがって、ほとんどの女性は、尿酸値は「高くない」と判定されることになる。尿酸塩蓄積という現象を考える際には、そのような判定は適切かもしれないが、実際の臨床的なエビデンスは多くない。さらに、基準値内であれば女性の中にあっては「高め」となる尿酸値を示す場合にも、臨床的に特にフォローする必要はないのかについても知見は少ない。

本シンポジウムでは、富田が、多数例での検討をもとに、尿酸値の男女差は約 2mg/dl であり、女性においても男性と同様の生活習慣が尿酸値の上昇と関連していることを報告した。東京女子医大の谷口敦夫先生には、最近の症例をもとに、痛風に結びつく尿酸値について、女性にお

1) JR東日本健康推進センター

Masako Tomita

2) 安田女子大学家政学部管理栄養学科

Masayuki Hakoda

ける検討を報告していただいた。尿酸塩蓄積症である痛風に関し、発症時の尿酸値は男女で違いが認められないことが示された。このことから、尿酸塩蓄積を指標とした場合には、 7.0mg/dl という基準値は男女で変える必要は無いことが示唆された。最後に箱田が、心血管疾患や死亡と関連する尿酸値の男女差について、コホート研究をもとに報告し、心血管疾患や死亡との関連については、その有無も含め、男女で違いがある可能性を示唆した。

女性および小児の尿酸値についてのシンポジウムは、本学会では初めての試みであり、尿酸の基準値について、多面的に考える必要があることが示唆された。この領域での研究がさらに進歩し、治療ガイドラインへの反映など、実地臨床に結びつく成果が得られることが期待される。本シンポジウムを企画された藤森学会長および貴重なデータをご報告いただいた演者の先生方に深謝したい。